

R. コンネル著 多賀太監訳

ジェンダー学の最前線

(2008 世界思想社 292P 2,300円+税)

多賀 太



著者名を見て、『ジェンダーと権力』の著者R. (Robert) W. Connellとは別人だと思われた読者も少なくないだろう。両者は同一人物である。日本語版序文で自身が記しているように、著者は、原著の刊行後にRaewyn Connellに改名し、現在は「女性」として生活している。

本書は、人間科学の様々な領域におけるジェンダーへの多様なアプローチを独自の視点から接合させ、総合的に論じたものである。全8章にわたって多角的に展開される議論をあえて集約するならば、次の3点になるだろう。第1に、ジェンダーは、複雑で多様性に満ちており、単純な二分法でとらえきれものではない。第2に、一方で、ジェンダーは社会構造として個人の身体と行為を規制するが、他方で、個人は主体的にジェンダーを構築する。第3に、ジェンダーは、グローバルな視点でとらえられる必要がある。各章の概要は以下の通りである。

まず、第1章「ジェンダーとは何か」、第2章「学校・鉱山・性・戦争」において、初学者も念頭に置きつつ、上記の論点が、豊富な具体例に基づいて示される。

続く第3章「差異と身体」では、身体と「ジェンダー」との関係についての理論的考察が行われる。ここではまず、従来のジェンダーのとらえ方が3つに類型化される。①生殖上の性差が他のあらゆる性差に反映されると見なす「身体-機械」モデル。②生殖上の性差と社会的な性差を区別してとらえる「二領域」モデル。③社会過程は生殖上の性差を無効化してしまうほど強い影響力をもつと見なす「身体-キャンパス」モデルである。その上で著者は、これらのいずれもジェンダーに関わる実際の現象を説明する上では不十分

分であるとして、「社会的身体化（ソーシャル・エンボディメント）」という、身体と社会構造が相互に影響し合う循環モデルを提唱する。

第4章「ジェンダー関係」では、ジェンダーを社会構造としてとらえるにあたり、「権力関係」「生産関係」「感情関係」「象徴関係」という4次元モデルが導入される。これは、複雑なジェンダー現象を読み解くための「分析的な」区分であり、『ジェンダーと権力』[訳書1993]や*Masculinities* [1995]で提起された3次元モデルを発展させたものである。加えて、ジェンダーは社会関係を通じて常に生成されているものであるから必然的に歴史性を伴うことや、ジェンダー関係の内部に変化への傾向が備わっていることが、多くの事例と研究を参照しながら示される。

第5章「個人生活におけるジェンダー」では、ミクロレベルでの考察が展開される。ここでは、社会構造としてのジェンダーの規制力に目配りしつつも、ジェンダーの多様性や複雑性、個人の能動性や葛藤などが強調される。「性役割の社会化」理論は、これらの点が十分説明できないとして批判される。続いて、「ジェンダー・アイデンティティ」や「セクシュアリティ」に関しても、通常思われているほどに確固としたものではなく、多様で、内的な矛盾を抱えており、その趨勢は歴史的に変化しうることが例証される。

第6章「マクロレベルにおけるジェンダー」では、グローバルな視点の重要性が強調される。世界史とは、ある意味で、ローカルな社会の異なる「ジェンダー秩序」同士が接触し、互いに変容してきた歴史であるともいえるが、近年のグローバル化の波は、そうした変化を極端に加速している。こうした中で、多国籍企業や世界市場、国際機関や国際メディアなど、国

家による規制が及びにくい領域でのジェンダー関係への着目が促される。

第7章「ジェンダーと知識人」では、19世紀半ばから現代までを大きく4つの時代に区分し、それぞれの時代の社会的状況と関連づけながら、西洋の「ジェンダー理論」の展開についての知識社会学的考察が行われる。

最後に、第8章「ジェンダー・ポリティクス」では、個人生活から世界社会に至る様々なレベルでのジェンダー関係の持続と変化の実態が、利害関係や^{ムーブメント}運動の観点から論じられ、ジェンダー理論やジェンダー研究がポリティクスに果たす役割の示唆で締めくくられる。

限られた紙幅の中で多様なジェンダー学の知見が見事に集約され、随所に著者のオリジナルなアイデアが盛り込まれている。初学者にも、研究者にも、有益な一冊であろう。

(たが・ふとし 関西大学准教授)